

《教育長メッセージ 第24号》

『小中一貫教育』



戦後、日本の公立学校の義務教育は、小学校6年間、中学校3年間の「6・3制」の学制で進められてきました。

しかしながら、ここ数年、社会状況の変化や子どもの発達段階を考慮して、さまざまな市区町村で「小中一貫教育」に取り組んでいます。

海老名市でも、今年度から、文部科学省、神奈川県教委の指定を受けて、有馬中学校区（有馬中、有馬小、門沢橋小、社家小）で「小中一貫教育」の研究に取り組んでいます。

現在、平成28年度から、有馬中学校区以外の5中学校区に「小中一貫教育準備委員会」を設置して、平成29年度に市内小中学校全校での取組に向けて準備を進めようと計画しています。

それでは、小中一貫教育とはどんなものなのでしょう。

簡単に言えば、あたりまえのことなのですが、子どもたちの教育を9年間のトータルで考えるということです。

大きな教育問題になっている「中1ギャップ」という言葉をご存知でしょうか。これは、小学校と中学校の校種の違いや発達の問題などから、中学校生活に適応できず、不登校やいじめなどの問題行動が中学校1年生で急増するという問題です。実は、海老名市でも同様の問題が起きています。

もちろん、その対応として何もしてこなかったわけではなく、小中連携教育を進め、小中学校の教員がお互いに授業や子どもの様子を参観したり、情報交換したり、6年生の中学校体験入学を実施したりしてきました。しかしながら、問題の抑制には効果があるとしても根本的な解決にはなっていないのが実情です。

私の経験では、小学校の5、6年生と中学校1年生は同じような発達段階にあり、中学校に入って1年生の後半から2年生ぐらいになると、もの見方や考え方が変わってきます。（個人差はありますが。）

また、学級担任制の小学校と教科担任制の中学校の学校のシステムと、それに伴う学校文化は、想像以上に大きな違いがあります。

そんな中で、子どもたちは学校が変わったからといって、急に成長することはなく、戸惑いながらも中学校に自分を合わせようと努力します。そして、思春期という心と体の成長が不安定な時期でもあり、それに疲れてしまう子やその大きなストレスを問題行動という形で発散する子がた

りするのです。

子どもの成長は小学校、中学校の校種違いに関係なく、9年間、途切れることなく続きます。小中一貫教育は、9年間を見通して子どもたちを育み成長させるために、子どもの発達に合わせて学校のシステムを改善するということです。

これまでは、学校のシステムに子どもたちが合わせるといった教育が展開されてきましたが、これからは、子どもたちに合わせて学校のシステムを再構築するという教育が展開されるべきではないかということで、小中一貫教育が進められているところです。

今回は、引き続き「小中一貫教育2」ということでお話します。